

エルドレッド・バニラ死刑囚は極北の刑務所ではなく、首都に建つ刑務所に収監されていた。灯台下暗しとはまさにこのことで、その例外性に特別扱いされていることを確信したが、それも当然かとすぐに納得した。

学生時代の友人に金を握らせて離させた情報だったが、この男は学生の頃から既に金を介したやり取りにはどこまでも紳士的だった。その紳士性はもちろんこと、蓄えている情報の質量は今となってはさらに磨きがかかっていた。

「スパイから情報屋か、あまり変わらないな」

「外注スパイみたいなものだったからね、そりゃそう変わらないよ」

友人はおもむろに空を見上げた。おれもつられて空を見る。

路地の形に切り取られた快晴の空をかつての敵国の旗を尾に掲げた輸送竜が飛んでいる。我が物顔で、飛んでいる。かつてこの町を焼いた国の竜が、飛んでいる。

頭の仲がじくりといたむ。嫌な痛みだ。記憶が掘り起こされるときの痛みだからだ。顔を歪ませかけたところで。

「敗戦国のスパイなんてろくな目に遭わないからね、これでいいのさ」

空を見上げたままの友人がそういった。実にあっけらかんとしていた。うらやましい。この男はどうやら切り替えて生きているらしい。納得は出来ていないようだが。……………どうやら、この男はおれなんかよりもずっと大人らしい。

横顔を見ると、その目と一瞬目があつた。また空に向けられる。

「キミはあまりいい噂を聞かないな」

空に竜の姿はなかった。

「死刑囚の居場所を知りたがるような男の下に良いウワサが立つのか？」

「具体的な話を聞いた」

「言っているのか？ それ？」

「人に売れるほど確立していない。まだ、な」

言外に何を伝えようとしてくれているのか、考えるまでもなかった。しかし強く濃い疑問が同時に浮かんだ。なぜ、というところだ。無意識に口が動きかけた。しかし、友人の丸みを帯びた手が上がってそれを制した。

「何も訊くなよ。迷惑だ」

「……………ああ、もちろんだとも」

キレのあつた目がまばたきをはさんで穏やかなになる。そして断る理由のない提案をされた。

「それはそれとしてだけでも、今日は空いているか？ 空いているなら飲まない？」

「いいぜ、ひさしぶりに行こう」

死刑囚の脱走が成功しても失敗しても、どちらにせよ一緒に穏やかな時間を過ごすことはなごできなくなるのだから。